

# 幼稚園にのぞむこと

—すばらしい人間としての幼児をみつけよう—

牧田和子

幼稚園にのぞむことについて、何か私の感じていることをとお申しつけで、ここに、日ごろ感じておりますことを、しるさせていただきます。

1 こんな子がいいな!! というが

「幼稚園に入園すると、三歳の子も、四歳の子も、五歳の子も、急に大きくなったような気がする」とある幼稚園の先生がいわれた。そして「子どもは、親の所で甘やかされて育つより、友だちや先生と一緒に、団体生活をしてまねなければいけないし、きちんとさせなければならぬ。とかく最近の若い親はしつけができていないので、園ではきびしくしつける必要があります」とつけ加えられた。入園に際して、どのようなお考えで園児をお決めになるのかうかがうと、

「名前を呼ばれたら返事をするようになってきていること。いわ

れたことに對して理解できること。友だちと、特にかけ離れた行動をしないで一緒にできるような子どもであること。先生のいうことが守れて、はきはきした明るい子がいいですね」というお返事だった。

さて、生後三年、家庭の中で育てられ、家族、特に母親との結びつきの強い三歳児にとつて、見知らぬ園長先生の前で、はきはき答えて、おちついて行動できるだろうか。もしも、口もきかずに、母親の手を固く握りしめて、母親のうしろにかくれたりしている、そういう子どもは入園できなくなるだろうか。もし、のろのろと行動していたら……もし、自分勝手に振舞い、しゃべり続けていたら、……と、いろいろな行動様式を示すであろう幼い子どもたちを思い浮べてみた。

某先生のいわれるように、元気で明るい、はきはきした子は、誰がみても「いい子」であろう。だが、「いい子」は、いつ、ど

こで、どのようにして、育ってくるのだろうか、と考えると、三歳児にして、このような入園基準でしか見られないとしたら、子どもは生後三年にして、人生の岐路に立たされるのである。三歳児にして、できのよい子どもと、そうでない子どもが、ふり分けられるのであるから、もしこの幼稚園にも入れてもらえない子は「普通ではない」というおすすめをいただいたようなものである。

世の母親の中には、ただ、食物や衣服や遊具を与えておけば、そのうちに大きくなって何でもわかるようになる、と思い込んでいる人たちも存在する。これは、親の問題、育て方の問題である。幼児教育の場が最も必要なのは、こうした家で、ただ大きくなる時間を待たれている子ども、さらには、放任されている子ども、どこかに障害があつて友だちと接する機会に恵まれない子どもたちであろう。

子どもが育つ、というのは、人間が、人間を知る機会を与えられることから始まるのであるから、母親、父親、きょうだい、友だち、おとなたちに、楽しく、気持よく、何回も出合うようにすることは、必要なことといえる。「こんな子がいい子!!」という注文のしかたは、おとなが子どもに期待し、先まわりして、その型にはまらないのは不良製品視するという、「人間を忘

れた見方」といえないだろうか。「こんな子がいい子!!」というのは、むしろ、子どもがおとなに示してくれる人間の生き方ではないだろうか。それゆえに、一通りではなく、毎日、毎時間、毎分、その一つ一つの瞬間の中で、子どもたちは、おとなにむかつて、「こんな子がいい子なんだよ!!」といているのではないだろうか。それは、おとなが見つけなければならぬもので、おとなが待っていて、網をかけるものとは異なるものだろうと思う。

最近、幼い子どもと接することが多くなったので、特に次のことを述べたい。

## 2 育てること

「もうすぐ幼稚園にはいるのに、話をしないのですよ」「言葉が少なくて、遅れているのでしょうか」「本を見たがらないのですよ」「遊んでも一つも片づけられないし、世話がやけるのです」「小さい時は、おとなしくて手のかからない子どもでしたけれど、幼稚園にはいつてからは、何やかやうるさいことをいだけして、世話がかかります」

母親たちの訴えをうかがうと、目の前の子どもたちは、相当

に困らせる子どもらしい。

ところが、Hくんはこういう状況だった。

「話をしない」「言葉を知らない」「友だちが来ても知らん顔で勝手なことをしている」「何かいっているので声をかけると黙りこんでしまう」「誰のいうこともあまりきかない」

口をきかない自分勝手な子どもだ、とその母親は思っている。

父親は、そのうちによくなる。男の子は概して発達がおくれるが、大きくなれば問題はない、と考えている。園の先生は、みんなと一緒に行動がとれないので、集団生活をさせるのは無理だろう、と考えられて、教育相談を受けることをすすめた。母親が来談された。その情報を集めてみると、生育史では次のことが明らかになった。

出生時・母子共に健康状況良好、問題なし。

乳児期・栄養、母乳と人工栄養、発育良好。

一歳・母親は一人っ子のHがおとなしいので、編物や洋裁を

よくした。

・近所には家がなく工場内一軒の社宅で、つき合う人もなかった。

・町に買物にでる時は父親が面倒をみていて母親は急いで行って来た。

二歳・お菓子、おもちゃなどほしがるとは少ない。与えれば喜ぶ。

・おもちゃは乗物（自動車、ダンプカー、汽車等）を好む。

・へやの中を走りまわるとか、動きまわるとは少ない。

・病気はほとんどしない。

・三歳に間近くなってからは、テレビの子ども番組の時間になると、自分でチャンネルを合わせようとする。

三歳・話することは少ない。言葉（語り）も少ない。両親の

いうことは理解できる。本人が話をする時の発音は明瞭である。

・病気をすることは少ない。

・絵本のりものの絵をみるだけ。

・ひとりごとはいっているので、声をかけると黙ってしまふ。

・忙しい時になるとぐずぐずいうので、母親が手伝ってしまう。

四歳・新しい家に転居した。周囲は新興住宅地で、家が多い

が、一、二歳児が多い。

・幼稚園にはいる。

・母親は、子どもが大きくなったので家で内職を始めた。  
母親の仕事が邪魔することがある。

・一度歩いた道はよく覚えていて、他の道へそれたりすると怒る。

・身体は健康で、外遊びは好きになってきた。三輪車をほしがる。

・強く一度禁止するとあきらめるので、扱いやすい。

### 母親から子どもへの話しかけ

乳児のころから、あまり泣いたりぐずったりしなかったの  
で、一人で寝かせておいた。(くわしくきくと、母親は乳児  
のそばにあまりいたことがなく、隣のへやで自分の仕事をし  
ていて、子どもの目覚めた瞬間とか、おしめがよごれてぐず  
ぐずいい始めた時のようすなど知らない。)

また、授乳時、入浴時、おしめをとり替える時も、母親は  
黙ってしていた。

抱き上げるとか話しかけるとか、歌をうたってきかせる等  
は、二歳、三歳のころもしてあげたことがない。父親は、ひ  
ぎにのせたり、かた車をして遊んだりする。その場合、キャ  
ッキャッとはしゃいだ。

現在は、自分勝手が強いので

「いうことをきかない子はきらいですよ」

「ちゃんと片づけなさい!!」

「自分のことは、自分でしなさい」

「いうこときいたら、○○買ってあげる」

「わがままいっているとパパにいつけますよ!!」等で、  
ほめることはほとんどない。内職の仕事の最中に話しかけて  
きたり邪魔をするので、きつく叱る。そばへ近寄ることを禁  
止している場合が多い。

Hくんの「話をしない。自分勝手な振舞いが多い。集団の中  
で一緒に行動することが大変である」という訴えの問題行動を  
考えてみたい。

なぜ、話をしないのか。

言葉を知らないのか。

みんなと一緒の行動がとれないのか。

Hくんについて

なぜ……できないのか、とみることに、まず誤りがある。な  
ぜ……できないという状態が今でもあるのか、どんなことをし  
てあげたのか、というHくんへの働きかけと現況をみる、とい  
う見方をしなければならぬ。

話し言葉の状況一つを取り上げてみても、Hくんは話をしな

いというが、話ができないのではないのだ。ひとりごとはいし、必要な時ははっきりいう。だがそれは一方交通の話しことばであって、人と人とのつながりを必要とする人間関係の発展としてのコミュニケーションの必要を引き起こすものになっていない。

つまり、人と人とのつながりが育てられていたであろうか。

Hくんとおかあさんが、言葉が必要としたのはどんな時、どんな場面であったろうか。母親のふところであか抱かれ、母乳を与えられている時、ほほをなでられ、顔をみつめて語られ、笑いかけられていたであろうか。Hくんは、こうした経験がきわめて少ない。母親はだまって乳を与え、だまって着替えをさせ、だまって抱き、おぶっていたという。身体的愛撫と、やさしい言葉の響き、そしてやさしい表情があることと無いことは、人間が人とのつながりを学習する上では、大きな差異をもたらすことである。

情緒の分化のおこる発達のプロセスで、Hくんは大きな忘れものをされてしまっている。しかしHくんは幸に健康な心身をもっていたために、おとなへの警告として、話をしない状況、ひとりごとをいうがすこしでも声をかけると黙りこむことを示し始めたのだ。

「あなたは今、私になにをしてくれるのだ、私は今、あなたを必要としない」

「あなたが声をかけたいと思うのなら、いつ声をかけたらいいのか、その機会を早くみつけないさい」

「もっと、私を楽しくさせてくれることをあなたは考えなさい!!」

この警鐘の聞こえないおとなに注目したい。

その後、Hくんはプレーセラピーの中で、話をしないわがままな子から脱皮した。

黙っている、声をかけられるとひとりごとをやめて、黙ってしまう。ということは、Hくんにとって、声をかけられるということと、楽しくない状態との結びつきが強いことであり、本人にとって、いやなことに重なっていることにはかならない。楽しいことと、話しかけを結びつけていくことである。

子どもが育つ、というのは、育てられる時の働きかけをのぞいて、育った結果だけを見てこの子の育ち方を評価してはならないことを、Hくんは教えてくれた。

広い工場敷地の中の、たった一軒の社宅で、若い母親は子どもに話しかけたい、歌ってきかせたい、遊んであげたい、とい

う気持ちをわきおこすであろうか。育てられる環境と、そこに参  
与した人間のダイナミックスを、もう一度とらえなおして、こ  
のHくんに出合うとき、今、Hくんに話しかける言葉、一緒に  
遊ぶことの一つ一つが思い当たってくるのである。

ここに、育てられる子どもの人間との出会い、相手としての  
遊具との出会い、心を表わすことばの操作が伸びてくるのであ  
る。Hくんを見てみると、人間は動かない固体ではなくて、よ  
く変わっていくものだとということを感じさせられた。

### 3 受け入れるとは

「S子ちゃんは口をきかない子で、幼稚園に入園してから受  
け持ちの先生は、ほとんどその声をきいていません。どこか悪  
いのではないでしょうか、ちえ遅れか、異常児か、はっきりわ  
かりませんが、幼稚園では何をしても口をきかず、ぐずぐ  
ずしているので困ります。家ではよくはしゃぐと親はいいって  
います。集団生活は不むきな子だと考えますので、相談をお願い  
します」

某幼稚園の主任の先生の紹介状をもって相談申し込みにみえ  
た母親は、「この子は異常児だといわれておりますので、どう  
ぞよろしく願います。親としては、どうしても異常とは思

いませんが、園ではいつもいわれます。どうしたら口をきいて  
くれるでしょうか」と深刻な表情で小声で訴えた。数日後、私  
はそのS子ちゃんと母親に再び会い、S子ちゃんの相談を担当  
した。母親の面接担当者は他の相談員の先生であった。

S子ちゃんは、母親と離れるのにまず時間がかかった。同じ  
時間に、S子ちゃんと母親は別々のへやで遊んだり、お話した  
りして帰る時に会うように約束して別れた。

S子ちゃんと私は、遊戯室にはいった。「このおへやでは何  
をして遊んでもいいのよ。窓、鏡、蛍光灯をわってしまおうと危険  
で、先生だけではあなたを守ってあげられないので、それだけ  
は気をつけましょう」この約束で、あとは自由にしてよいこと  
を告げた。S子ちゃんはプレールームの戸の所でこっくりした。  
私も室内のよく見えるところ、S子ちゃんに対してまさりげな  
くしていられるところに立った。少し戸だなに寄って、止まるこ  
とも、行動することも容易にとれる姿勢を保った。

S子ちゃんは、自分でドアをしめると、首をすくめて、上目  
づかいで室内を見わたした。私は、S子ちゃんに「何をして遊  
びましょうか」とか、「もっとこっちへいらっしやい」とか声  
をかけずに、S子ちゃんと同じようにゆっくり室内をながめま  
わした。もしS子ちゃんと目が出合っても同じ表情でいること

のできるながめ方である。

S子ちゃんが、入口でぐずぐずしているのではなくて、今、おへやをゆっくりみている、たしかめている、という気持を大切にしかかった。今、上目づかいで眺めているあり方を、そのままの形で、認めたかった。この、遊びにはいる前の姿勢は、S子ちゃんに、どうしても必要な時間なのだから当然の姿勢であり、当然の時間経過として受けとった。S子ちゃんは四十分間そこに立っていた。そして十五センチぐらい前に、かすかに動いた。十分間かかった。第一回目の出合いは、こうして終わった。「S子ちゃんのお遊びの時間は、きょうはこれでおしまいよ」と 時計を指さすと、S子ちゃんはにっこりして見上げてへやを出た。廊下で母親にあうと、S子はにこにこして近づいた。「おかあさん、おもしろかったよ!!」とつたえていた。母親は「先生に何をしていただいたの」と聞いたが、S子ちゃんは「おもしろかったの!!」をくりかえした。

次週、再びプレールームにはいると、S子ちゃんは、二十五分間をつかって、かすかにかすかに進み、部屋の真中に立った。そして遊具などと真正面に向かい合って遊具を眺めた。そこに二十分立っていた。「S子ちゃんの好きなおもちゃ、みつかったのね」 S子ちゃんの背中から小さい声でいうと、S子ちゃん

んはふり向いてうなずいた。「そう、みつかったのね」とくり返すと、S子ちゃんは、つかつかと遊具だの前へ進み、むく犬の玩具の所へ手をのばした。あと五センチぐらいの所で手をとめて、じつと犬を見つめていた。第二回目はここで終わった。第三回目に来談した時、母親は「S子が、とてもおもしろいことをしていただいてるそうで……。家にかえってから、いろいろなおもちゃの話をいたします。勝手なことをいたして对不起ですしょう」とあいさつした。

その日、S子ちゃんは、プレールームへ走り込んでいった。いきなり遊具だの前へ行って犬をとりだした。「これで遊ぶの」というなり、リモートコントロールのスイッチをおして犬を動かした。「S子ちゃん、犬くと遊ぶのね」 S子ちゃんは「うん」といって、犬をへやのあちこちに連れ歩いた。親子の犬は、S子ちゃんに動かされ、ワンワンないた。母犬と子犬はS子ちゃんの足のところで止まった。

S子ちゃんは犬をすみにおくと、いきなりビニール刀をとりだしてきた。引き返してもう一つのビニール刀をもって私の所へ来た。「えーい!!」、何回も打ち込んで来た。「えーい!!」とS子ちゃんの打ちこみに合わせて声をあげると、S子ちゃんも、小さい声だが、三、四回に一度は「えーい」といって打ち

込んでくる。そのうちに、私のビニール刀はつなぎ合わせだつたために折れておちた。

「あはゝゝゝ」——「あーはゝゝゝ」とS子ちゃんは、大きな大きな声で、からだを折りまげて笑った。笑いはなかなか、とまらなかつた。私は床にすわっていた。

「あー、おもしろかつた!! また、やろうよ、え——いつ!!」と構えたビニール刀は、勢いよく私の頭の上にふり下りて来た。

「あー、助けて!!」

「え——いつ!! え——いつ!!」 何回も振りおろして来た。「よ——しっ!!」と立ち上がると、「え——いつ!! やつつけるぞ——!!」と勢いをまして来た。「強いんだから、えーいつ、おまえの刀は、弱いじゃないか、え——いつ!!」何回も打ちこまれた、再び私のビニール刀は折り曲げられて落ちた。

前よりも大声で笑った。

「あー、おかしい、せんせい、ばかだねー、すぐ負けちゃつて。S子、つよいでしょ、本当はもつとつよいんだから、ねえ、またやる? またやつつけてあげる」

一息にしゃべったS子ちゃんの顔は、汗と笑いで別人にみえた。

「強いからねえー、どうして私は負けたのかしら。S子ちゃんより強いと思っていたのに、どうしてかしら、おかしいなあ」ひとりごとのようにいうと、S子ちゃんは、かけ寄って来て、「ほら、このところがちゃんとしていないでしょ。このビニール刀、長くついでずるいことするからよ。ばかねえ、もっとこう、ちゃんとなげばいいのに、ほら」

「あ、そうするといいのね」

「そうよ、よく見てちょうだい!!」よくしゃべった。声は次第に、しっかりとした句調で音量を増した。

この回からS子ちゃんはおしゃべりS子ちゃんになった。S子ちゃんは、よく笑うようになった。

二週後、園の先生が「見ちがえるように、元気に明るくなってきました」と伝えてこられた。

S子ちゃんにとって、プレールームも、友だちも、自分が自由に振舞ってもおそろしくない対象になった。S子ちゃんが、じつとしていることを、とがめずに、ありのままに認めていくことを大切にすることが、S子ちゃんの中で大きな力になった。受容ということは、子どもにとって、子どもの息のしかた、生きかたのテンポにあわせて、評価も、わくづけることもなく、うけ入れていくことであろう。幼児にとって、とかく、わくづ



けに制限される生活環境が、見のがされやすいことから、一考を要してみたいと考える。

#### 4 すばらしい人間としての幼児をみつけよう

子どもたちの遊んでいる姿をじっと見つめたことのある人なら、誰でも感じることできるものであるが、幼児の声、幼児のひとみには、不思議な美しさがある。

そこには純粹なものが脈うっている。

いちちょうの大樹の下で、まい落ちる葉が風にながされ、薄絹の舞うような動きをみせるとき、数名の子どもがその葉を追いかけて、声をあげている。右に左に、風のうごくままに走り、追う。

まったく、一幅の絵である。

ここには、自然と子どもが溶け合い、子ども一人一人が生き生きと喜びあっている。どの子どもにも、何のひげ目も、ためらいもなく、自分自身になりきっている。〇〇の子どもでなく、「みっちゃん」であり「たけちゃん」であり「ゆうちゃん」であり「ジョージ」である。

その一人一人が、一人一人で充分に行動している時、おとなは、その子に対して、「あのちえおくれが……」とか、「あの

言語障害児が」とか、「あの自閉症が」というだろうか。思わず「かずくん、おもしろそうね」とか「よっちゃん、元気だね」と声をかけて近づいている。そこには、〇〇症とか異常は存在しないと見えているからだ。

もし、多くのおとなが、子どもの現実の症状としての異常や欠陥や障害にとらわれずに、子どもをみることできたら、その子どものもっている障害や欠陥状況は、一つの現象であって、子どもの人格そのものでないことが、鮮明に印象づけられ、理解できるであろう。

幼稚園で、恵まれた環境と人に取りかこまれて教育をうけるとき、この幼児の一人一人の人格を大切にしながら、毎日の扱いが配慮されたなら、どんなにか創造性の豊かな、才能の可能性の高い子どもたちが、育っていくだろう。子どもにとって、暖かく、やさしい気持、たくましく、はげしい気力、倒れてもおきあがる体力は、こうした中で、一番よく伸びていくのではないだろうか。

(所沢市教育相談室)